

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-7

浴衣姿の麻里子は桔梗の部屋の縁側の椅子に尻こそばゆいような気持ちで座っていた。

ケ・セラ・セラ
なるようになるわ
未来は誰にも分らないけど

上機嫌で部屋に戻ってきた辰巳は湯上りの麻里子を見て、あっ、と内心で驚くと、たちまちにして山東京伝(作) :歌川豊国(画) の黄表紙『賢愚湊銭湯新話』の中の一節(そもそも湯上りの時美しき女はまことの美人なり) を連想していた。

と言うのも、『H酒造』は昭和9年に『H美術館』を開館して、価値ある多数の古美術品を現在も収蔵しているので、辰巳が江戸文化に対しても造詣が深かったからだ。

辰巳は浮かれ気分で縁側にいる麻里子と対坐した。

「何かいいことでもあったのですか？」と麻里子は自分も嬉しくなって訊いた。

「そうなんだ！カウンターだけのバーだが、とても気に入った。バーを利用すれば、そのホテルの真価がわかるんだ。採算を取りにくいパブリック・スペースだからね」と辰巳は力説することで、麻里子の放つ艶っぽいオーラを覆い隠そうとした。

「ナイトキャップに、デザートワインをルームサービスしてもらうことにした。急にあなたと飲みたくなったワインがあってね。駄目元で頼んでみたんだが、拍子抜けするぐらいにゲットできたんだ」と辰巳は気持ちが伝わるように、精一杯の笑顔を作って言った。

「どんなワインか楽しみです」と麻里子は眼で微笑して言った。

辰巳はその時、眼で微笑する女の癖に心動かされる理由について、体全体で円形があるのは眼球だけだからかもしれないと、なぜか突飛な発想をしていた。

先ほどのバーテンダーがルームサービスをしてくれた。

バーテンダーはワインクーラーからワインボトルを取り出し、辰巳にラベルを見せて抜栓するとワイングラスに注ぎ、テイastingをしてもらった。

辰巳は退室するバーテンダーに礼を言い、チップを渡した。

シャトーディケム2001年を口にした麻里子は、眼を見開いて沈黙した。

「これをあなたと飲みたかったんだ」と辰巳はチェックメイトをかけるように言った。